

元暦二年三月二十四日の卯剋に、豊前国門司、赤間の関にて、源平矢合とぞさだめける。その日判官と梶原とすでに同士軍<sup>どしいくさ</sup>せむとする事あり。梶原申しけるは、「今日の先陣をば景時にたび候へ」。判官、「義経がなくはこそ」。「まさなう候ふ。殿は大將軍にてこそましまし候へ」。判官、「思ひもよらず。鎌倉殿こそ大將軍よ。義経は奉行を承ったる身なれば、ただ殿原と同じ事ぞ」とのたまへば、梶原先陣を所望しかねて、「天性この殿は侍の主にはなり難し」とぞつぶやきける。判官これを聞いて、「日本一のをこの者かな」とて、太刀の柄に手をかけ給ふ。梶原、「鎌倉殿の外に主をもたぬ物を」とて、これも太刀の柄に手をかけけり。さる程に嫡子の源太景季、次男平次景高、同三郎景家、父と一所に寄りあうたり。判官の景気を見て、奥州の佐藤四郎兵衛忠信、伊勢三郎義盛、源八広綱、江田源三、熊井太郎、武蔵房弁慶<sup>つわもの</sup>などいふ一人当千の兵ども、梶原をなかにとりこめて、われ討つとらんとぞすすみける。されども判官には三浦介とりつき奉る。梶原には土肥次郎つかみつき、両人手をすって申しけるは、「これ程の大事を前にかかへながら同士軍候はば、平家力つき候ひなんず。就中<sup>なかんづく</sup>鎌倉殿のかへりきかせ給はんところこそ穩便ならず候へ」と申せば、判官しづまり給ひぬ。梶原すすむに及ばず。それよりして梶原、判官を憎みそめて、つひに讒言してうしなひけるとぞきこえし。

さる程に源平の陣のあはひ、海のおもて三十余町をぞへだてたる。門司、赤間、壇の浦はたぎりておつる潮なれば、源氏の舟は潮にむかうて心ならずおしおとさる。平家の舟は潮におうてぞ出できたる。沖は潮のはやければ、汀について、梶原敵の舟のゆきちがふところに熊手をうちかけて、親子主従十四、五人乗り移り、打物抜いて<sup>ともへ</sup>艦舳にさんざんに<sup>な</sup>薙いで廻る。分どりあまたして、その日の高名の一の筆にぞつきにける。

すでに源平両方陣をあはせて<sup>とき</sup>関をつくる。上は梵天までもきこえ、下は海竜神もおどろくらくんとぞおぼえける。新中納言知盛卿、舟の屋形<sup>かみ</sup>にたちいで、

元暦二年三月二十四日の午前六時ごろに、豊前国門司、赤間の関で、源平開戦と決まった。その日判官義経と梶原がもう少して味方同士で争おうとすることがあった。梶原が言うには、「今日の先陣を私にまかせてください」。判官、「私がいるからだめだ」。「それはいけません。殿は大將軍でいらっしやいます」。判官、「そんなこと思ったこともない。鎌倉殿(頼朝)こそが大將軍だ。私は命じられて戦っている。あなたがたと同じだ」と言ったので、梶原は先陣を切ることが許されず、「天性この殿は侍のあるじにはなれない」とつぶやいた。判官はこれを聞いて、「おまえは日本一の馬鹿者だ」と言って、太刀の柄に手をかけた。梶原は、「鎌倉殿のほかにも私のあるじはいない」と言って、これも太刀の柄に手をかけた。そこで嫡子の源太景季、次男平次景高、同三郎景家が、父と同じ所に集まった。判官の様子を見て、奥州の佐藤四郎兵衛忠信、伊勢三郎義盛、源八広綱、江田源三、熊井太郎、武蔵房弁慶などという一人当千のつわものが、梶原を取り囲んで、自分が討ち取ろうと前に出た。しかし判官には三浦介義澄がとりついた。梶原には土肥次郎実平がしがみつき、両人が手をすりあわせて言うには、「これ程の大事を前にしながら、味方同士が争えば、平家が活気づくでしょう。とりわけ鎌倉殿があとでお聞きになったらただではすみません」と言うので、判官は冷静になった。梶原はそれ以上なにもできなかった。それ以来梶原は判官を憎みはじめて、ついに讒言して死に追いやったということだ。

そうするうちに源平双方の陣の間隔は、海面三百メートル以上あった。門司、赤間、壇の浦は海水が逆巻いて落ちるような潮の流れなので、源氏の舟は潮に向かって思いどおりに進まず押し戻される。平家の舟は潮の流れに押し出されるように出てくる。沖は潮が速いので、汀の近くで、梶原は敵の舟がゆきちがうところに熊手をかけて、親子主従一四、五人で乗り移り、太刀・長刀を抜いて舳先から船尾へとまわってさんざんに切りつける。敵の頸や武具をたくさん奪って、その日の一番手柄と記録された。

いよいよ、源平両方が陣をあわせて関の声をあげる。上は梵天までも聞こえ、下は海竜神もおどろいているだろうと思われた。新中納言知盛卿は、舟の屋形に立ち、

大音声をあげてのたまひけるは、「いくさは今日ぞかぎり、者どもすこもしりぞく心あるべからず。天竺、震旦にも日本我朝にもならびなき名将勇士といへども、運命つきぬれば力及ばず。されども名こそ惜しけれ。東国の者どもによわけ見ゆな。いつのために命をば惜しむべき。これのみぞ思ふ事」とのたまへば、上総悪七兵衛すすみ出でて申しけるは、「坂東武者は馬の上でこそ口はきき候ふとも、舟軍にはいつ調練し候ふべき。魚の木にのぼったるでこそ候はんずれ。一々にとって海につけ候はん」とぞ申したる。越中次郎兵衛申しけるは、「同じくは大将軍の源九郎に組ん給へ。九郎は色白うせいちいさきが、むかばのことにさしいでてるかんなるぞ。ただし直垂と鎧を常に着替ふなれば、きっと見わけがたかなり」とぞ申しける。上総悪七兵衛申しけるは、「心こそたけくとも、その小冠者何程の事かあるべき。片脇にはさんで海へいれなんものを」とぞ申したる。

平家は千余艘を三手につくる。山鹿の兵藤次秀遠、五百余艘で先陣にこぎむかふ。松浦党、三百余艘で二陣につづく。平家の公達、二百余艘で三陣につづき給ふ。兵藤次秀遠は九国一番の勢兵にてありけるが、我程こそなけれども、普通様の勢兵ども五百人をすぐって、舟々の艦舳にたて、肩を一面にならべて、五百の矢を一度にはなつ。源氏は三千余艘の舟なれば、勢の数さこそおほかりけども、処々より射ければ、いづくに勢兵ありともおぼえず。大将軍九郎大夫判官、まっさきにすすんでたたかうが、楯も鎧もこらへずして、さんざんに射しらまさる。平家みかた勝ちぬとて、しきりに攻め鼓うって、よろこびの鬨をぞつくりける。

(以上 卷十一壇浦合戦)

その後源平たがひに命を惜しまず、をめきさけんで攻めたたかふ。いづれおとれりとも見えず。されども平家の方には、十善帝王、三種の神器を帯してわたらせ給へば、源氏いかがあらんずらんとあぶなう思ひけるに、しばしは白雲かとおぼしくて、虚空にただよひけるが、雲にてはなかりけり、主もなき白幡一流舞ひさがつて、源氏の舟の舳に、棹付の緒のさはる程にぞ見えたりける。

大音声をあげて、「いくさは今日がかぎり、おまえたちけって退いてはならない。天竺、震旦にも日本我朝にも並ぶものがいない名将勇士といへども、運命が尽きてしまえばどうにもできない。しかし名声は惜しい。東国の者たちに弱さを見せるな。いまこそ命を惜しまず戦え、私が言いたいのはこれだけだ」と言うと、上総悪七兵衛が前に出て、「坂東武者は馬の上でこそ一人前の口を聞かす、舟いくさの調練はしていないはずだ。魚が木にのぼったようなものであろう。一人ずつ捕らえて海に投げこもう」といった。越中次郎兵衛は、「同じことなら大将軍の九郎義経に組みなされ。九郎は色が白く背が低くて、出っ歯が目立っているそうだ。ただし直垂と鎧をいつも着替えるので、すぐに見分けにくいと聞く」といった。上総悪七兵衛は、「心は勇ましくても、その若造はいかほどのものか。片脇にはさんで海に投げ込もうぞ」と言った。

平家は千艘あまりを三つに分ける。山鹿の兵藤次秀遠が五百艘あまりで先陣で漕ぎ向かう。松浦党が三百艘あまりで二陣につづく。平家の公達が二百艘あまりで三陣につづく。兵藤次秀遠は九州で一番の強弓を引く者だが、自分ほどの実力はないが、そこそこに強弓を引く兵、五百人を選びすぐって、各舟の船尾と舳先に配置し、肩を一面にならべて、五百本の矢を一度に放つ。源氏の舟は三千艘あまりなので、軍勢の数こそ多かったが、バラバラに射たので、どこに強弓を引く者がいるのかわからない。大将軍の義経は、まっさきにすすんで戦うが、楯も鎧も耐えられず、さんざんに射られた。平家は味方が勝ったといて、しきりに攻め鼓をうって、よろこびの鬨の声をあげた。

その後源平互いに命を惜しまず、わめき叫んで攻撃する。どちらも劣っているとは思えない。けれど平家の方には、十善帝王〈帝〉が三種の神器をたずさえておられるので、源氏はどうなるだろうかと危うく思ったところ、しばらくは白雲かと思われて、空にただよっていたが、雲ではなかったのだ、持ち主のいない白幡が一本ひらひらと下りてきて、源氏の舟の舳先に、棹に結びつけるひもがふれるぐらいに見えた。

判官、「これは八幡大菩薩の現じ給へるにこそ」とよ  
ろこんで、手水うがひをして、これを拝し奉る。兵ども  
みなかくのごとし。また源氏の方よりいるかといふ魚  
一、二千はうで、平家の方へむかひける。大臣殿これを  
御覧じて、小博士晴信を召して、「いるかは常におほけ  
れども、いまだかやうの事なし。いかがあるべきとかが  
へ申せ」と仰せられければ、「このいるか、はみかへり候  
はば、源氏ほろび候ふべし。はうでとほり候はば、みかた  
の御いくさあやふう候ふ」と申しもはてねば、平家の舟  
の下をすぐにはうでとほりけり。「世の中はいまはかう」  
とぞ申したる。

さる程に、四国、鎮西の兵者ども、みな平家をそむい  
て源氏につく。いままでしたがひついたりし者ども、君に  
むかって弓をひき、主に対して太刀を抜く。かの岸につ  
かんとすれば、浪たかくしてかなひがたし。この汀に寄ら  
んとすれば、敵矢さきをそろへて待ちかけたり。源平の  
国あらそひ、けふをかぎりとぞ見えたりける。

(卷十一遠矢)

義経は、「これは八幡大菩薩が靈驗をお示くださったの  
だ」とよろこんで、手を洗いうがひをして、これを拝んだ。兵たち  
も皆同じようにした。また源氏の方からいるかという魚が一、  
二千匹ほど口をぱくぱくして、平家の方へむかった。大臣殿  
(宗盛)はこれを見て、小博士晴信を呼んで、「いるかはふだ  
んも多いけれど、このようなことはまだない。どういことなのか  
考えを申せ」と言ったので、「このいるかが、水面で息継ぎをし  
て水中に戻れば、源氏が滅びるでしょう。口をぱくぱくしなが  
ら通り過ぎると、お味方はあやういです」と言い終わらない  
うちに、平家の舟の下をまっすぐ口をぱくぱくしながら通過し  
た。(晴信は)「世の中はもはやこれまで」と申し上げた。

そうするうちに、四国、九州の武士たちは、みんな平家を  
叛いて源氏に味方する。いままで従っていた者たちも、主君  
にむかって弓を引き、あるじに対して太刀を抜く。むこう岸に  
着こうとすると、浪がたかくて着けない。ちかくの岸に寄ろうと  
すると、敵が矢さきをそろえて待っている。源平の国争いは、  
今日で最後と見えた。